

春夏秋冬

# 台湾徒然



第42回

## 海角七号

『海角七号』——現代青春映画で、スタッフもキャストもほとんどが新人という異色の作品が、興収1億台湾ドル(約4億円)を突破したと話題になっている。実に『悲情城市』以来の快挙だという。

『悲情』といえ、1989年にベネチア映画祭で金獅子賞を獲得した侯孝賢監督の名作。台湾史のタブーに挑戦した重厚な作品だったが、この映画そのものが台湾史を変えたといわれるほど台湾社会に衝撃をもたらした。

この『悲情』を抜いて台湾史上最に興収に迫っているときいて、久しぶりに映画館に足を運ぶと、なんとすごい行列ができています。台湾映画に人が並ぶという光景を久しぶりに見た。

それほど台湾では「台湾映画」が不評だった。『戲夢人生』『バナナパラダイス』『牯嶺街少年殺人事件』『熱帯魚』など、台湾とあまり縁がなくてもひとつくらいは観たという日本人はけっこう

ういらつしやるが、台湾の人にはほとんど通じない。

どうして台湾の人は台湾映画を観なのか。実は台湾映画は『悲情』を契機に大きな変貌をとげていた。

世界でもっとも権威ある映画祭でグランプリをとったことは、台湾の人たちを狂喜させた。実際これほど台湾の宣伝に役立った文化財は古今東西にない。文化当局は以来、映画に報奨金を出すことにした。条件は国際的な映画祭で受賞すること。映画人はこぞって映画祭を対象に映画をつくりはじめた。台湾映画は評論家好みの難解なものに傾斜していき、「台湾映画は観ません」が台湾の常識として定着したのだ。

映画館で公開してもすぐに消え去ってしまう。リバイバルもない。名画座もない。「台湾映画を観るには日本に行かなくちゃ」という時代が長く続いていた。その常識をくつがえす映画が流星のように現れたのである。



映画館前は大勢の若者が並び、夜店も出るにぎわい

いつたいその映画とは……。奄美出身の中孝介(なかこうけい)という歌手がいる。台湾でも抜群の人気を誇る。彼のコンサートが台湾南部の浜辺で開催される! というビッグニュースからこのドラマの幕はあがる。簡単にいうと本人が繰り広げるドタバタ劇なのである(中孝介本人が出演)。

お世辞にも傑作とはいえない。まともにも欠ける。しかし、いかにも台湾ならありそうなコメディにひとつの挿話をからませることによって、映画に感傷と興行きをもたせた。そして、中孝介の歌とともに爽やかな「読後感」を残すことに成功した。

主人公のギターリストは郵便配達物のバイトをしている。預かった手紙の束の中に「海角七号(七番地)」とのみ宛名が記された封書があった。彼は、その日本時代の住所をさがしあてて、八十の老婦人に、日本男性からの半世紀前のラブレターを届ける。それが、ドラマと平行して進むもうひとつのエピソード。やはり、現在と昔の日本がからんでくるわけだ。

しかし、映画を観ていても、台湾の中高年層ならたいいもつている日本人や日本時代への複雑なこだわりがまったくない。無色無臭なのである。『悲情城市』から20年、まさに「新台湾人」のつくった1本の映画が台湾映画を再生させたのかもしれない。

### 柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)、「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)